
迷宮は就職氷河期

siriuma

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷宮は就職氷河期

【Nコード】

N7746X

【作者名】

siriuma

【あらすじ】

迷宮に潜る冒険者を育成する学校に通う主人公。

エルフに生まれながら魔法の才能を一切持ち合わせていない彼は、パーティの仲間の中で一人だけギルドの内定をもらえず卒業出来な

いでいた。

長い寿命を持つ彼はそれを『準備期間』として受け入れるのだが、学園の依頼をこなすうちに知らずの内に彼は防衛都市シールドライ

ンを巡る争いの渦中に巻き込まれていく。

共に技を競い合った仲間は既に旅立ち、彼は学園の主と呼ばれる錬金術師と邂逅を果たすのだが……

薄暗き穴の中で

迷宮、それは人が人として生き始めた頃からそこにあり、時にその口より入りし者に災いをもたらし、時にその血肉により恵みをもたらす。

人類の繁栄と衰退にはいつも迷宮の影があった。

その認識は長い時を経た現代にいたるまで変わることなく、迷宮には未だにすべての望みをかなえられるだけの宝物が眠っているという。

そのため世界各地に無数に存在する迷宮に挑む者は後を絶たない。

村の力自慢が自らが井の中の蛙でない事を証明するために！

貧乏貴族の末弟が王女の心を射止めるために！

餓死寸前の孤児が世界に復讐する力を得るために！

夢見る若者が巨万の富を掴むために！

それを可能にするのが迷宮であった。

彼らは凶悪な化け物の巣窟に持てるだけの荷物を背負い、暗闇に閉ざされた世界を自らの足で広げていく。死と隣り合わせの世界に臆することなく飛び込んで行く彼らを人は冒険者と呼んだ。

管理迷宮『デウス・エクス・マキナ』二十四階層

「こいつが報告にあったフレアリザードの変異種か。確かにこの階

層にいるのは場違いだな……」

しつとりと水分を含んだ空気の中に腐った土の匂いと血の匂いが混じり合った独特な臭気を感じる。

これが一般的な迷宮の匂いだ。俺は用心深く通路の岩壁に隠れながら十数メートル先にいる獲物を観察する。

獲物は未だこちらに気がついた様子もなく、スンスンと鼻を鳴らしていた。

その姿は頭一つに二本の腕、おまけに二本の足でしっかりと地面を掴み二足歩行をしている所は人間種と変わりはない。しかし、細かい所は大きく異なっていた。

薄暗い坑道の中でも異彩を放つ紅い瞳。

耳の付け根まで広がった口、その中にはずらりとナイフ程の長さの牙が生えそろっており、その奥からは二股に分かれた長い舌が覗いていた。

通常種のフレアリザードはその全身を覆う鱗の色がルビーの様に赤いのに対し、この変異種の鱗はサファイアの様な見事な青色であった。

このタイプの変異種は俺も見た事がなく、より好奇心が湧いてくるのを感じる。——冒険者特有の悪い癖だ。

視線を下に移すと通常種の物と比べてもやや太い二の腕には、まばゆい白金の輝きを放つ大きな柳葉刀が握られており、その先端には鮮血がべつとりと付着していた。腰の根元から伸びる太く長い尻尾も満足そうに揺れていた。

「食事の直後つてところか……変異種の『同族喰らい』となるとさすがに二年生達には荷が重いな……」

俺はここに来るまでに見つけた幾多の通常種の亡骸を思い出しながらそう推測する。

変異種は通常種に比べてより強大で、特殊な能力を持っている場合が多い。

その多くは放っておくと通常種を駆逐しなり変わる。それはより強い者が生き残り、子孫を残すからである。

モンスターの中ではより強い遺伝子が優性遺伝になる事はモンスター学？を履修している学園生ならだれでも知っている。

だが『同族喰らい』だけはこの例に当てはまらない。

古くから存在する種族の中から突然現れる『同族喰らい』

子孫を残さない代わりに彼らの強さは変異種と比べても群を抜いている。

種の保存を考えないという生物として見れば異端な彼らは劣等種が周りにいる事が耐えられないとばかりに元の種を駆逐する。その強さはもはや別の種と考えた方がいい。

「他の迷宮に出たのなら名のある階層主にでもなっただろうに……」

惜しむらくはこのダンジョンが学園生のための箱庭——『管理迷宮』であつた事だ。

俺はため息をつきながら土壁から身を乗り出す。仕事クエストの時間だ。

管理迷宮には英雄はいらない、必要とされるのは冒険者資格を所得していない二年生でも倒せる通常種の方だ。それが迷宮の本来の摂理に反することだとしても……

いくらかの寂寞の思いを感じながらも俺は足音を消しながら駆けていった。

しかし幾歩も歩かない内に『同族喰らい』は俺を見つけて狂喜の雄

たけびを上げる。

それは捕食者が獲物を見つけた時そのものであった。

「さすがに奇襲は受けてはくれないか……」

俺は心の中で舌打ちをすると歩法を普段の物に戻し、両足を大きくスライドさせ、スピードを一気に上げる。

そしてそのまま背中に背負った剣に手を伸ばしかけて止める。

今回のクエスト内容に変異種のデータ収集も含まれていた事を思い出したからだ。

「クエスト失敗したら、またアンナが泣くだろっからな……」

このクエストを俺に回した同級生の泣き虫錬金術師の性格を考えるにそれは十分にありそうな事だった。

俺は背中の大剣の代わりに腰に付けた短剣を取り出す。

その数は八本、形こそあつらえたように同じであつたが刀身の色はそれぞれ異なっていた。

その中から透き通った水色の刀身を持つ一本を構えるのと『同族喰らい』が咆哮と共に大剣を振りかぶるのは同時であつた。

「グルアアアアッ！」

『同族喰らい』の屈強な足はしっかりと地面を踏みしめ、たつぷりと体重を乗せて大剣を振り下す。

その軌道上に俺がいる事を確認した『同族喰らい』が上機嫌に舌をチロつかせるのが見える。

その刹那俺は一気にスピードを限界まで引き上げ『同族喰らい』の

横をすり抜ける。

目標を目前で取り逃がした大剣は空を切り、俺の後ろにあった頑丈な岩肌をバターののように切り裂く。

「頑丈さ、パワー共にB+といったところか？それに氷耐性も劇的に上がってるようだ」

すれ違いざまに腹部を狙って放った氷属性の短剣の一撃はほんのわずかにしか鱗の鎧を通り抜けていなかった。

「グガアアアッ」

薄暗い洞窟の中で怪しく光る紅き眼光から察するに『同族喰らい』はまだまだ元気そうだった。

俺は間合いを測り直しながら冷静に戦力を分析する。

フレアリザードの通常種の頑丈さ、パワーはCである事を考えれば別次元の強さである。

そして弱点属性であった氷属性も克服されているようだった。

個体差や、変異種の更に『同族喰らい』である事を差し引いても驚くべき事だった。

「グアアッ！」

「っと、スピードも段違いか」

再び振るわれた大剣を俺は後ろに一步下がることでかわした俺は知らずの内に手に汗をかいている事に気づく。

どうやら『同族喰らい』の放つ威圧感は『本物』の迷宮に生息する魔物と比べても遜色ない様であった。

重量のある大剣から次々と繰り出される連撃に俺は感嘆のため息をつく、技術もさることながら大きな体を利用して退路を削って行き、こちらを少しずつ追い詰めていこうという狡猾さがとても厄介であった。

「戦技 B 知性 B + スピード B か……これだけの魔物が『管理迷宮』で生まれるのは不自然すぎるっ!!」

首にかけた魔物の力を測る魔道具の放つ光の色を確認し、俺は余裕をかなぐり捨てて叫ぶ。

もう少し同族を喰って経験を積んでいれば更にもう一ランクは上がるだけのポテンシャルを感じるだけに俺はこの依頼にうすら寒い物を感じていた。

「現段階で総合 B + クラスってどこか？ アンナにしては随分な依頼だな!!!」

もう少し来るのが遅ければ二年時の終わりに受けた冒険者資格試験での成績がクラス？の A ランクだった俺には手が余っていたに違いない。

普段こんな依頼を回すような奴ではないため、アンナも想定外だったのだろう。多分俺も管理迷宮にこんな化け物がいると言われても信じられないだろうし。

「これは『化ける』前にとっとと殺すしかないな……」

実は俺にとってニアクラス？の魔物と一対一で戦うのは初めての事

だ。パーティ戦ではある程度の経験は積んでいたがソロとパーティを同列に扱うのはおこがましい。

俺はもう一つの依頼であるデータ収集を早々に終わらせて倒す事だけに専念することにした。

俺は両手に四本ずつ短剣『パレットダガー』を構えると『同族喰らい』の連撃の隙間にねじ込むようにして一斉に投げ放った。

属性を付加されていない無属性を含めれば無、火、氷、光、闇、土、風、雷、の八種の属性を持った短剣が一斉に『同族喰らい』の鱗の隙間に喰らいつく。

「グルアアアアアアッ!!」

迷宮に轟く咆哮と金属が肉に突き刺さる音、焦げる音、凍りつく音、浄化される音、崩れ落ちる音、腐る音、切り刻まれる音、爆ぜる音が醜悪なハーモニーを奏でる。

「うん、鱗の隙間なら効くみたいだ、でも致命傷は難しいみたいだな」

さすがにそこまでの化け物ではないらしいとほっと息をつく。

今の一撃にはさすがの『同族喰らい』もダメージを受けたのか、全身から鮮血を流しながらも紅い眼光を俺に向ける。

そこには怒りと——喜びがあった。

「……これはまずいかもな」

ゾクリと肌が泡立つ感覚を誤魔化すように思わず口笛を吹いた俺だったが、ここに来て『同族喰らい』は俺がただ食われるだけの獲物ではなく、自分に対抗できるだけの力を持った戦士である事を理解

したらしく、口を三日月のように歪に広げ、その中では真っ赤な舌がチロチロとダンスを踊っていた。

『同族喰らい』はより強い戦士と戦う事を望む。いや、正確に言えばそれだけが望みだ。

授業で習った内容が迷宮中で久しぶりに役に立ったなと苦笑する。

「いや、知らなくても顔つきを見れば分かる事か」

「グルルルウウウツ」

こちらが準備するのを待つかのように攻撃の手を止め、視線を俺の背にある剣に向ける『同族喰らい』は

モンスターとしては異端であったが、戦士としては好感が持てた。

そして俺もそろそろ血がたぎってきた所だった。

この時、俺は魔法に秀でる種族であるエルフの出身でありながら戦士としての道を歩んでいる身として同じ異端である『同族喰らい』に一種の共感を覚えていたのかもしれない。

俺は『同族喰らい』に答えるように背中の剣を抜いて『同族喰らい』に真っ向から対峙した。

……しかしあくまでもこの戦いはヒトと化け物の戦いであった。

それを思い出させたのは『同族喰らい』が俺の名乗りに答えて大剣ではなく口を大きく広げたからであった。

その光景に俺は見覚えがあった。『同族喰らい』の元となった種族であるフレアリザードがある攻撃をするときに見せるそれと『同族喰らい』の姿が重なる。

今の今まで元の種族を忘れる戦いをしていただけに完全に頭の中か

ら抜け落ちていたそれ。

『フレアリザード』

パワー：C 耐久：C スピード：C - 戦技：D 知性：C -

総合ランクC -

弱点属性：氷

ここまではよい、管理迷宮の中ではそれなりに強い部類ではある物の既に真の迷宮に足を踏み入れた事のある俺なら問題なく対処できたはずであった。

だが、フレアリザードにはその名の通り炎を吐くという特殊能力があったのだ。

……特殊スキル：フレアブレス 危険性B

「しまった！」

完全に虚を突かれた俺の目に映るのは導火線のように伸びる真っ赤な舌と喉奥で燦っていた蒼き光だった。剣での攻撃を囫にし、十分に体内で滾らせたであろうそれは今にもその顎から溢れそうであった。

「くそつ、間にあうかつ!？」

この戦いで最大の危機に俺は慌てて地面に低く伏せ、腰のポーチから取り出した小さな球——アイスクリスタルを握りつぶす。

砕けたクリスタルは次々に氷の塊を吐きだしていきたちまちの内に俺の体を氷の結晶で覆っていく。

捕縛用の氷属性アイテムであったために刺すような寒波が俺を襲う

が背に腹は代えられない。

「グルオオオオツ!!」

俺の体を氷が完全に埋め尽くすのと同時に『同族喰らい』の口から真っ青な炎が勢いよく吹きだす。

——プレス攻撃

通常種のもでも十分厄介だったそれは竜種並みに威力が上がっており、頑丈な岩壁を蠟のように溶かしつくしながら俺の頭上を通りすぎ、氷で覆われたはずの背中を僅かに焦がす。
だが幸運な事に氷が完全に溶け切ると『同族喰らい』がプレスを吐き終わるのはほぼ同時であった。

「これはフレアリザードならぬボルケイノリザードだな」

溶けた氷でびしょびしょになりながら立ち上がった俺に『同族喰らい』は丸太の様な尻尾をむちのように繰り出す。
視界いっぱい広がるそれを俺は体を低く倒しながら『同族喰らい』の懷に飛び込む事でかわす。

そして俺はこの戦いで初めて背中中の剣を振るった。

刹那の後、噴き出たのは俺の血ではなかった。

薄暗いこの箱庭の中で早鐘のように脈打つ心臓だけが動いていた。
生きている事を確かめるように吸った空気はいつもの迷宮の匂いだった。

「……おっと、ここからは時間との勝負だったな」

迷宮の死骸が長く残らないのは他の魔物が食べつくしてしまうからである。

俺は他の魔物がよってこない内にボルケイノリザードの死骸から手早く必要な物をはぎ取ると出口へと向かった。

わらわらと生き残ったフレイムリザード達が集まってくる頃には俺は安全圏に退避していた。

各階に設置されている転移ポートに辿り着くと俺は目を閉じて『一階出口まで』と念じる。

古代の魔法文明の遺産とされるそれは俺の意思に反応し、光の竜巻を作り出す。

体を捻るような感覚と共に俺は出口へと飛んだ。

「……ちゃんと飛んだみたいだな」

無事に出口へと飛んだ事にほっとしてしまった俺は思わず苦笑した。その名の通り管理されている管理迷宮とは違い本物の迷宮では転移ポートの使用は慎重に行わなければならない。

古代の遺産とされるこの転移ポートにはどういう訳か魔物がよりつかないのだが、迷宮にない物は『絶対』だけと言われるように例外もあるし中には故障している物もある。

それどころか一見故障していないように見えても転移事故が起こったり、それ自体が罠である事もままある。そのため熟練の冒険者になればなるほど転移ポートに対する警戒心は大きい。

だが、転移ポートを利用しなければ見つけれない階層や、単純に労力の問題などもあるため全ての転移ポートを無視できないのが悩みどころなのだ。

そんな事を考えながら門を潜ろうとすると横手から声を掛けられた。

「その生徒、迷宮から出る前に生徒手帳と依頼書を提出したまえ」

迷宮の入口にはこうした関所があり、どの冒険者が入り、そして帰ってきたのかをきちんと記録している。

毎回の事なので特に何を思うでもなく俺は言われたとおりにする。

「はい、どうぞ」

門番の男は渡された紙に目を通すと判子を押してから返却する。

「……よし、確認が取れた。よく生きて帰ってきた」

門番はぽんつと俺の肩を叩くにかつと愛嬌のある笑みを浮かべた。もしかすると彼の顔見知りの中にあのボルケイノリザードに喰われた生徒でもいたのかもしれない。

何となくむずかゆい気持ちになり俺はどうもと頭を下げながら学園に向かった。

更衣室で着替えた後俺が向かったのは真新しい新校舎ではなく旧校舎の方であった。

俺の通うシールドラインASは三年制の冒険者養成機関である。

一年時は迷宮や外の知識を学びながら、選択した各教科での戦闘訓

練を積む。

二年時は一年時と同じように腕を磨きながら、この学園が誇る管理迷宮で実戦訓練を積み、年度末の冒険者資格試験へと備える。では晴れて冒険者資格を得た三年生は何をするのか？

管理迷宮を飛び出して一人で真なる迷宮へと挑むのか？

大型ギルドに所属しパーティを組んで迷宮の完全攻略へと乗り出すのか？

それとも国に仕える騎士にでもなるのか？

はたまた王立の研究機関に所属し研究漬けの毎日を送るのか？

そうでなければ最終防衛ラインであるシールドラインを超えて暗黒大陸を魔族の手から取り戻すべく冒険の旅に出るのか？

残念ながら大部分の人間はそうではない。

ここではないどこかの世界の学生達と同じく、彼らを待ち受けているのはそう——就職氷河期であった。

つまるところこの学園の三年生とは冒険者資格を持っているにもかかわらず就職できなかった彼らへの救済策なのであった。

いくら冒険者資格を持っていようと迷宮に潜るのは資金がいる。

回復薬、地図、武器、防具、その他数えきれないほどの貴重な資源を消費してなにも手に入れない事もあるのが迷宮だ。

学費を払い続ける限り彼らは学生として扱われ、冒険の際に大型ギルドには劣るものの、学園からの様々なバックアップを受ける事が出来る。

そこで成果を上げる事が出来れば、ギルドからの勧誘や、武器メーカーからのスポンサー契約が得られるのだ。

そんな三年生の活動拠点が旧校舎だ。俺は旧国営ギルドの面影を残したそんな旧校舎のとある一室を目指していた。

廊下を歩きながらあたりを見渡すと、校庭でただ黙々と武器を振る者、クエスト掲示板とにらめっこする者、教室で地図を片手に熱心にミーティングするパーティなど誰もが必死だ。

ここで成果を上げられるかどうかに一生涯がかかっているのだから当然だ。

俺がここにいてもわかるだろうが、つまり俺、フィン・ヴィンセントも迷宮で一山当ててスポンサー契約を狙う三年生ということだ。

同期の仲間達が次々と内定を取っていく中で余ってしまったみそっかす。それが俺達であった。

だが、だからといって俺は別段焦っているわけではない。それは俺が長命のエルフ族だからである。

俺はこの期間をいつか暗黒大陸へと乗り込むための準備期間としてとらえている。

生き急ぐように駆けまわっている他の皆には悪いが、俺はゆっくりと準備を整えてから冒険に出るつもりだ。

もっとも、エルフ族なのに魔法が使えないというのがスポンサー契約を断られた原因の一つである事も忘れてはいないのだが。

俺は魔力を一切持っていない事を示す黒髪を無意識にいじりつつとある教室の前で止まる。

旧錬金準備室であったそこは、今はただ一人の女子生徒によって私有化されている。

アンナ・ヒュンレイ

この旧校舎の生徒達曰く『永遠の三年生』『旧校舎の主』『むしろ階層主』とまで呼ばれている彼女がいつからそこにいるのかは誰も知らない。

少なくとも二年前俺がこの学園の門を叩いた時には既に噂されていた事を覚えている。

そんな彼女が今回の依頼主であった。

俺は彼女に教えられた通りに規則正しく三回ノックをする。

「アンナ、俺だ。依頼の物を持ってきた」

声をかけて数秒、カツリと魔法錠が外れた音を合図に俺は室内に入る。

すぐさま目に飛び込んできたのは怪しい液体の入ったフラスコの山次にそこらの床に転がっているかわいらしいぬいぐるみ、そして最後に一番奥に背もたれのついた長椅子にちょこんと座っている白髪の少女であった。身長は低い、もしかするとこの部屋にある大きめのぬいぐるみにすら劣るかもしれない。

この学園に誰よりも長く在籍しているはずの彼女は、そんな俺の視線に気づかず読んでいた本からゆっくりと顔を上げた。

「フィン……遅い……死んだかと思った」

そう言っただけで自分の隣をポンポン叩く、日向ぼっこでもしているかのようなゆったりとした動作だった。多分ここまで来いと言う事だろう。

「死なねーよ。飯買ってきたから一緒に食うぞ」

「ん」

アンナはコクリと頷き奥の炊事場に手を洗いに行く。

「さて……」

正直に言っただの踏み場もないのだが、ぬいぐるみを踏んでしまうと彼女は一週間は口をきいてくれないので安全地帯を縫うように彼女に接近する。

途中で棚に飾られているオークの生首と目が合うが、いちいち気にせずに進む。例の生首の隣にクマのぬいぐるみが置いてあるあたり俺はこいつの感性が理解できない。

長椅子に座り包みを広げるとアンナが両手から水をぼたぼた零しながら戻ってくる。

「アンナ、行儀悪いぞ。ちゃんと手を拭け」

「ん」

「いや、俺の服で拭くなよ……」

「……服で拭く……ぶぶっ」

「いや、あのな……」

忘れていたが、アンナの笑いの沸点はかなり低い。

「ん？」

「……もういい」

小首をかしげてこちらの顔を覗き込む無垢な瞳に俺はアンナを説得する事をあきらめた。

一応着替えたばかりなので清潔だ。タオルの代わりにはなるだろう。拭き終わったアンナに包みから取り出したサンドイッチを手渡す。カリカリと小動物のようにそれを齧る横で話を切り出す。

「管理迷宮に出現した変異種の討伐は終わった。後で報告書と一緒に素材を渡すから確認しておいてくれ」

「んっ」

まだ半分も減っていないサンドイッチから口を離して頷くアンナ。

「それとどうやら変異種は『同族喰らい』だったみたいだ。正直俺でも危なかった」

紅い瞳を瞬かせるアンナ、どうやら驚いているようだった

「……管理迷宮は『歪み』……生まれやすい」

「……それでも異常……今月で三件目」

「……怪我しなかった？」

アンナの言う『歪み』とは何なのかは俺には分からなかったが、それでも一月に三体も『同族喰らい』が出現するのは見た事も聞いた事もなかった。

もちろん偶然という可能性もあるが、それは限りなくゼロに近い値だろう。するともしや人為的な力が働いているのかもしれない。うまく解決できればスポンサー契約も夢ではないかもしれない……

ふつつと好奇心が湧いてくるのを感じる。それは猫をも殺すような物だ。

しかしこれは俺でなくてもこの学園の生徒なら誰でも持っている物だろう。

「……気をつけて……あと首突っ込むの、危険」

だが、ここに例外がいた。

嗜好に没頭していた意識をアンナのかすれた声が引き戻す。

顔を上げると両目に限界まで涙を溜めたアンナの姿が映った。

三年生である以上こいつも冒険者資格を持っているはずなのだが、そうは思えないほどアンナは泣き虫であった。

初対面の時に一言も会話できずに泣かれたのは今でも覚えている。

「そうは言っても俺は冒険者だぞ？」

危険を顧みず迷宮潜り、財宝を探し求めるのが世間一般の冒険者像だ。

そんな冒険者に危険な事をするなという無意味さは分かるだろうか？

「……ダメ」

服の裾を掴み、ふるふると首を振りダメと繰り返すアンナに俺は嘆息する。

これまでの付き合いからこれ以上こねるならなら大声で泣くのも辞さない構えだというのを理解したからだ。

俺は迷宮の魔物は怖くなくても、大事な友人であり依頼主の泣き顔には弱かった。クライアント

どちらにせよこの学園で唯一俺にまともな依頼を持つてくるアンナがこんな調子では迷宮に繰り出すのは難しいだろう。

冒険も大切だが、休息も同じくらい大切だろうと気持ちを入れ替える。

「分かった。装備の新調もしたいし、暫く探索は中止するさ」

「……それなら……私に任せる。武器の強化……それが今回の報酬」

こいつ報酬にかこつけて武器を取り上げる気だ……

いそいそと腰のベルトに手をかけるアンナに俺は涙した。

おまけ（不定期）

モンスターレシピ？

Name: ボルケイノリザード（フレアリザードの変異種の『同族

喰らい』)

カテゴリ：クラス？（人型魔物や階層主に多い）

ステータス（クラス内での）

頑丈さ B + パワー B + 戦技 B 知性 B + スピード B

特殊能力：ボルケイノブレス 危険性 A +

総合危険度 B +

属性耐性

特に弱点なし。

しいて言えば雷に弱い

ただしフレアリザードの時に弱点であった氷属性は逆に通常種よりも耐性が上昇していた。

備考

管理迷宮『デウス・エクス・マキナ』二十四階層にて遭遇。それまでに数十体の同族と数人の生徒を喰らっていた模様。

『化ける』一歩手前までマナを溜めこんでおり、一歩間違えば大災害を引き起こしていた可能性もある。

装備は本学院生の物を奪った物らしく、血を洗えば新品同様に手入れされていた事が窺える。

フレイムリザード種と同様に炎のブレスを使用するがその威力、射程共に比較にならないほどに強力になっている。

その他、他の迷宮に出現する『同族喰らい』と比べて特におかしな点は見当たらなかった。

ただ、フレイムリザードの本来の生息階層は二十二〜二十階層なのだが、この個体が二十四階層にいたのは少し不自然に感じた。しかし、この個体から逃げるようにフレイムリザードが階層移動している事を確認しているため、偶然と見るのが妥当だろう。

以上でこの依頼に関する報告を終える。

……あと、依頼物の欄にこっそりお菓子を書き加えるのは止めとけ。ちゃんと今度買ってきてやるから。

防衛都市シールドライン

アンナの部屋を出た俺はシールドラインの町を歩いていた。

武器を取り上げられてしまったので散歩以上の意味はないが、生来のんびり屋の気質を持つエルフの俺にとってそれは大した苦痛ではなかった。

武器など必要な時にだけあればいいのだ、いつも手にしていないと落ち着かないなんて職業病には罹りたくはない。

「なんて言っても、いつも感じている重みがないのは寂しいものだな」

ほんの少しばかりの愚痴をもらしつつそのままエリア？と書かれた標識を通り過ぎ、ゆっくりと歩きながら見慣れた街並みを眺める。

いきつけのパン屋の煙突からはモクモクと煙が上がっていて香ばしい匂いに惹かれた人々が列をなしていた。

俺は昼食をとったばかりなのでそのまま直進し、大通りに出る。昼間の商店街とあって急に人の流れが増し、人の海に溺れそうになる。大通りには服屋、武器屋、防具屋、八百屋、飲食店、書店その他たくさんの店が並んでおり、どの店も声を張り上げて客引きを行っていた。――八百屋の一際元気のいい声が印象に残った。

商店街を抜けるとこの町の行政府である統制塔から伸びる一際広い石畳が広がっており、その上をおもちゃの剣を持った子供が親の目を気にせず駆けまわっていた。

このあたりはあまり訪れないので、少々新鮮に感じながら見て回る事にする。どうやらこの辺は公園となっていていらしく、先ほどの子供の親と思われる人影も少し離れた所に見つかった。

誰かを誘ってここで食事をとれば楽しいかもしれない。そんな事を

考えながら日が暮れるまでエリア中を散策した。
今日一番の驚きは帰り道で見かけた魔法を使わずに不思議な現象を起こす奇術師には長年生きてきても知らない事がある物だと感心させられた事だった。

「平和だな……」

十分に散策し、心の垢を流した後に出た言葉がそれだった。
その言葉はついさつきまで魔物と殺し合いをしていたから出てきた皮肉の言葉ではない。

俺はこの町と『外』の町を比較して、心より安堵しそう言ったのだ。

防衛都市シールドラインそれはその名の通り人類の最終防衛ラインにしてもつとも強固な壁である。

エリア？から？まである区画には例外なく魔物の侵入を防ぐための結界で覆われている。

これは今の技術では再現不可能な物で、この町どころか周辺の迷宮の力自体も抑えてくれると言われている。

そのためこの町の住民は管理迷宮に迷いこまず、この町から出ない限り魔物を恐れることなく生きていく事が出来る。冒険者学校があるとはいえ、この町の大部分はそういった非戦闘市民で占められている。

これが『外』ならそうはいかない。そもそも管理迷宮などを作り、冒険者を育成する余裕はないし、近隣の迷宮から湧き出る魔物達が昼夜を問わずして襲ってくる。八百屋だろうと冒険者だろうと多々うべきときには戦わないとならなかった。さらに町同士の連携はほぼなく、前線基地でもない限り人の行き来は期待できないのが現状だ。

この世界はシールドラインを境として一気に地獄と化するのだ。

そのためシールドラインは時にホワイトラインとも呼ばれている。
世界を地獄の暗黒大陸と天国の白色大陸の二つに分ける境界線として……

つまりこの町は目に見えるデッドラインなのだ。

不幸な事に暗黒大陸に生まれ落ちた俺は未だにこの光景に慣れる事は出来ない。

この町に住んで三年目になってもいつ魔物が襲ってくるのかと怯える自分がいる。

そう言った意味では一時でも武器を手放す事は本当は怖い。現に予備の武器は常に確保している。

だが、暗黒大陸も元から今の名で呼ばれていたわけではなかった。
今の人間にかつて暗黒大陸と白色大陸が一つだった時代を覚えている者はいったい何人残っているだろうか？

エルフである俺は、その少ない生き残りの一人だった。

かつて、全ての財を集めたとされる大迷宮の崩壊と共に突如として各地に生まれた迷宮。

そこから世界中にあふれ出した魔物によって一つの時代が終わりを告げた。人類の生存圏は半分にまで縮小し、俺の故郷であるエルフの里もまた闇に包まれた。

それを見ている事しかできなかった幼き自分、あれから長い時がたった。

俺が育った故郷の森はここほど栄えてはいなかったが、代わりに時間がゆっくりと流れていて、木々はいつだって俺をやさしく包み込んでくれた。

エルフの尺度で測っても『長い』としか言えない月日が過ぎても俺の中から消えない原風景。

俺は既に自分の中にしか存在しない景色を思い浮かべ、これまでの事を振り返る。

焦ってはいないと思う。故郷を取り戻すと決め、長い月日をかけてこの町に辿り着いた時も喜びはなかったし、二年の終わりにパーティの仲間で自分だけがギルド入りを断られた時も俺は落ち着いていた。

だが本当にこれでいいのかという思いもあった。

最近俺には大切な物が欠けているのではないかという思いが膨らんでいた。

それが何かまでは分からないが、それを取り戻さない限り俺はこの町を出る事は出来ないのではと思う。

この町に入った時には頼もしく見えた高い城壁が、今の俺にはこの町に閉じ込める檻の様に見えた。

「帰るか……」

目的とは裏腹に沈んでしまった気分を引きずるようにして俺は帰路についた。

エルフという種族には睡眠をとるという習慣はない。

時に木々に包まれたまま何十年と動かないエルフもいるが、彼らは人間の様に意識を手放しているわけではないし、睡眠欲という物を

感じる事すらない。

しかし、戦闘などの過度な運動をした後には十分な休息をとる必要がある。回復魔法が使える者の多いエルフならそれすらも必要ないのだが、生憎俺は悪い意味で例外だった。

つまり何が言いたいかというと……

「いつつ……また筋肉痛か」

こういう事だった。昨日の戦闘は自分で思っていた以上に心身に負荷をかけていたらしく、俺は宿にしている『旋風亭』につくなり食事もとらずベッドに身を投げたのだった。

こういった時、人間とは違い意識を手放せないのはエルフの数少ない短所と言えるだろう。数時間おきに自作の薬を塗っているのだが一向に痛みが引く気配はない。

職業柄体を鍛えている俺もここまで酷い筋肉痛を体験したのは数えるほどだった。やはりそれだけ昨日のボルケイノリザードが大物だったという事だろう。

「本当に危なかったな……」

怪我はしなかったとはいえ本当はギリギリの勝負だった。

俺も暗黒大陸を抜けてこの町に来という事もありあってそれなりに腕には自信があつたのだがやはり世界は広い。

「とは言ってもな……」

それにギルドには入っていないとはいえ俺もシールドライン近郊の迷宮には潜った事はある。

ソコの鉄則として安全第一で進んだとはいえ、結構な深さまで潜っ

てもあのなかなかレベルの敵は見当たらなかったのを覚えている。単に俺が遭遇していない可能性があるとはいえ、どちらにせよアレが二年生では手が出せないである事は間違いない。

戦闘ランクとはステイタスの内どれか一つ変わっただけでも目に見えて違いが出てくるものなのだ。そしてランクは高ランクになるにつれ下のランクとの力の差は激しいものになる。

つまりBランクとCランクの間にある力の差はCランクとDランクにある力の差とは比べ物にならないという事だ。

それを考えれば『総合』ステイタスがーランク以上上昇していた昨日のボルケイノリザードがいかに異質であるかという事実が浮かび上がってくる。

「やっぱり自然にあのランクの魔物が生まれるとは考えられない」

パーティで元の種族であるフレアリザードをヒイヒイ言いながら狩っていた頃に比べると自分の腕が上がった事を実感すると共に、やはり今回の依頼はどうもおかしいと感じていた。

普段俺が受ける依頼はアンナが何処からか持ってくる依頼だ。アンナからの依頼とはいっても元の依頼主は学園という事になっているため、アンナは単なる仲介人だ。

となると怪しいのは学園関係者となる。それに例の魔物と遭遇したのも学園の管理迷宮である。学園が何らかの実験を取り行っているも不思議ではない。単なる事故かそれとも……

とは言っても、依頼を出されてからの時間経過や前提となる情報の誤りから依頼書の内容と現場の状況が食い違う事はよくある事であり、それを想定に入れて動く事は冒険者にとって暗黙のルールだ。

そのため、元々の依頼主が悪意を持ってこの依頼を出したのかは定かではない。

受け取った依頼書にも学生課の印が押されているだけであり依頼書から依頼主を特定するのは難しい。

「まさか学生課で直接聞くわけにもいかないしな」

もし、この異常が学園によって仕組まれた物であった場合、俺がそれを嗅ぎつけたと思われるのは得策ではない。

それに下手に学園に反抗的素養を持つていると判断された場合大型ギルド加入やスポンサー契約は絶望的となる。

ある程度確証を持ち、なおかつ味方となる人物を見つけるまではこの件は学園側に知らせるべきではない。

と、なると手掛かりはアンナが会話中に漏らしていた言葉くらいしかない……

「……『歪み』か」

聞き覚えのない言葉だ。授業でも聞いた覚えはない。

しかし、アンナの口ぶりからするとそれが『同族喰らい』の出現に関わっているようだった。

幸い学園には王国最大級の図書室がある。午後には薬も効いてくるだろうし散歩がてら行ってみる事にしよう。

「すまないアンナ。どうしても気になってしまっただ。それにこれはチャンスかもしれないしな」

一瞬アンナの泣き顔がちらついていたが、あふれ出した好奇心を止めるのは難しかった。

彼女にすまないと考えつつも俺は自分の都合を優先する事にした。

「……痛いな」

今後の方針を決めたと俺は相変わらず引く気配のない筋肉痛と、新たに生まれた胸の痛みと戦う事から始めるのだった。

窓から覗く太陽が最も高い位置に上った頃、俺はベッドから起き上がり体を入念にチェックしていた。

「よし、問題はないみたいだな」

昨日の戦闘で酷使した足や、氷越しとはいえブレスを受けた背中 of 皮膚が心配だったのだが、一族秘伝の薬の効果か問題なく治ったようだ。

鏡で自分では見えない所まで隅々と確認した後、俺は学園の制服を身に纏う。これは冒険者学校の制服とあって並みの防具よりも優秀であり、これを強化したり、リメイクして迷宮に潜る者もいる。

中には卒業した後まで使用している者がいるという信用性の高いものだ。俺の着る男子の制服は丈夫で汚れにくい事で有名な黒鎖絹製ブラックチェインシルクであり、デザインもなかなか気に入っていた。

俺の部屋のタンスの中を開ければ予備の制服がずらりと並んでいるはずだ。

「んっ、襟が少し歪んでるな」

どこかおかしい所がないか鏡で身だしなみをチェックした後、俺は部屋の隅に立てかけていた柳葉刀を手に持つ——昨日の唯一の戦利品だ。

抜き身なのは前の所持者であるボルケイノリザードが鞘を身につけていなかったからである。

元から存在しなかったのか、破壊願望を持つ『同族喰らい』のボルケイノリザードがこれを手に入れた際に鞘を必要としなかったのかは定かではないが、そのまま持ち運ぶのには問題がある。

シールドラインの町は冒険者が多数いるため武器の所持は認められているが抜き身の武器をそのまま持ち歩くのは法律違反である。

そのため俺は冒険者に必須のアイテムである『冒険者の袋』に柳葉刀をしまった。

明らかに袋の収容面積を超える柳葉刀をあっさり飲み込むこの袋は、とある迷宮に出現する『アンリミテッドアリゲイツ』というワニの姿をした魔物の胃袋を加工した物だ。

この魔物はいくらでも物を食べられるという特殊能力を持っているため、それを特殊な加工により物を自由に取り出せるようにした物がこれである。

ちなみにこの魔物は冒険者資格試験で潜る管理迷宮にも生息しており、卒業生及び三年生はみな長らくお世話になるアイテムだ。

俺は柳葉刀を貪欲な袋にしまうと部屋の鍵をかけて町へと繰り出した。

俺の泊まっている宿屋から学園への道はそう近い物ではなかったが、長く住んでいるだけあり裏路地などの地図に載っていない近道をしていったためそう時間がかかる事はなかった。

通り道で行きつけのパン屋で買った焼き立てのパンを齧りつつ、俺が向かったのは図書館ではなく、こじんまりとした教室だった。

アンナの部屋とはまた違った独特な雰囲気を持つ教室に俺が堂々と入って行けたのはこの教室の住人が旧知の仲だったからに他ならな

い。

「おや、フィンではないですか。何だか随分と久しぶりの様な気がします。本日はどのようなご用件でしょうか？」

一目で高価なアイテムと分かる物から用途不明ながらも怪しい雰囲気漂わせる一品までがずらりと並んでいる棚の横を通り過ぎ、俺は同じ三年生の中でも同期である彼女——スノウ・ローレイに話しかけた。

俺の記憶によると二十日ぶりに出会った彼女は、しかし記憶のままの姿であつた。

女子の制服を後衛職仕様にアレンジした白鎖絹で編まれた柔らかそうな制服に身を包み、黒いマントを肩からかけた魔法使い風の恰好をした彼女は、一本一本がさらさらでゆったりとした紫髪が特徴だ。アンナとは対照的に出る所は出た体型でとても人間種とは思えない美貌を誇る彼女はこの学園ではいい意味で有名人だ。

「久しぶりだな、スノウ。今日は依頼人としてきたんだ。迷宮で手に入れた武器の鑑定を頼みたいんだが」

スノウはこの一癖も二癖もある生徒達が通うこの学園でも異質なパーティーである『メフィストフェレス』のリーダーでもある。

彼女達は俺とは違い特定のギルドの援助を受けずとも利益を得る事が出来ると判断し、他のギルドから圧力を掛けられないようにあえて学園に留まっているのだ。いわば学園の顔である。

そしてスノウはそんな政治的手腕や卓越した魔法使いとしての実力とは別に、パーティーの非活動日に趣味でアイテムの鑑定や取引を行っている事でも有名であつた。

「……そうですか。君が私の所に来るといふ事はそれなりの物を持

つてきたのかな？」

片眼鏡の奥でスノウの藍色の瞳がきらりと揺れる。それは商売人特有の損得を計算する眼ではなく、コレクター収集家としての眼のようだとは俺は判断した。

「それで、依頼の品物は何処ですか？」

「落ち着け、今出すから……」

好物を前にした犬……と言っては失礼だろうが、まさにそういった様子のスノウをなだめる様にして俺は冒険者の袋から柳葉刀を取り出す。

しかし、それを眼にしたとたんスノウの瞳からは興味の色が失せ、落胆した様子が見えた。

「これが……どうしたんですか？特に強化もされていないようですし……」

スノウが落胆するのも無理はない。この柳葉刀はそれなりに上質な物とはいえ、彼女の眼を引く程の物ではないからだ。

具体的に言えば二年生の中でも優秀な部類に入る者なら多少の無理をすれば買えてしまう程度の物だ。

そう言った意味ではこれを例のボルケイノリザードが持っていた事は自然に思える。

だが、この一件が何者かに仕組まれた物ならこの武器は黒幕によって用意された物である可能性が浮上する。それはごく僅かな物ではあったが、可能性があるなら無視するわけにはいかなかった。

そして、僅かでも学園関係者が目を光らせている可能性を考えると鑑定は信頼できる者に行ってもらう方が良い。彼女程の実力者なら

ば学園の横槍も入りづらいだろうし人格面でも信頼できた。

……まだ確証を掴んでいないのに自分でも警戒しすぎとは思っただが、俺はこの件について間違った判断をしているとはどうしても思えなかった。

「とりあえず何か術式が付加されていないかどうかみてくれ。何せちよっと入手経路が特殊なんだ」

「このレベルの武器にですか？……なるほど面白そうですね、ではちよっとお借りします」

いぶかしみながらも鑑定を始めてくれるスノウに俺はほっとする。

その顔には好奇心が戻って来ているように見える。何せ武器に術式を付加する技術を持つ者は現代では限られていた。

そしてそういった能力を付加されるのは最上級の武器と相場は決まっているのだ。

それをちよっと高級なだけの武器にわざわざ施す者がいるかどうかは考えるまでもないだろう。

スノウもその点については顔に出さないが分かっているはずだ。

しかし、俺は魔力がないとはいっても腐ってもエルフだ。魔力的な物に対する感応度は他の種族の追隨を許さない。この武器に触れた時に何かビリっとしたといった程度だが違和感を感じたためこうしてスノウの所へと持ってきたのだ。

それからしばらく両者ともに無言の時が続いた。

スノウは柳葉刀に特殊な液体をかけたり、木の枝のようなものでつついたり、時に大胆にも匂いをかいだりしながら鑑定を続けていく。磨き抜かれた柳葉刀の刀身に映る彼女の瞳は真剣そのものだ。

多分俺の存在すらも忘れてるに違いない。——俺がエルフでなかったら暇を持て余していたかもしれない。スノウが鑑定を始めてからそう言えるだけの時間がたった。頭上にあつた太陽が西から俺達を照らし始めた頃、スノウはようやく柳葉刀から目を離し、俺と向かい合った。

「結論からいうと、君の見立ては大当たりの様ですね。これは間違いないく『魔剣』だ」

「——ッ」

「おや、君の驚いた顔を見るのは初めてだね。どうやら確信があつて持ってきたわけではなかったみたいだね」

スノウはちよつと驚いたような顔をしていた。

しかし、驚きの度合いで言えば俺の方が遥かに上だったと思う。

もしかして、とは思っていた。故郷で一度だけ触ったことのある魔剣と似たような感覚を感じたからだ。

しかし、いざそうだと言われると実感がわかない。本来魔剣には二種類の意味がある魔物の力が宿った武器という意味での魔剣、そして魔法による術式を施されたという意味での魔剣。

前者を手に入れるのは難しくはない、だが後者を手に入れるためには類稀な幸運が必要と言われている。それだけ術式による恩恵はすさまじいと言われている。

冒険者達の中にはこれを手に入れる事が目標だと語る者もいる。俺もそれなりに長い時間を生きてきたが実際に魔剣を見たのは三度目で手に入れたのは初めてだった。

「それでどんな術式が施されているんだ？」

逸る気持ちを抑えつつスノウに尋ねる。浮かれている場合ではない。

俺がここに来た目的を間違えてはいけない、これが魔剣だというなら追加された術式から術者を特定できるかもしれないのだ。つまり場合によってはその術者こそが俺の敵である可能性も考慮に入れないといけないのだ。

それに、俺の危惧していた事が現実味を帯びてきたという事でもある。

気がつけば興奮は去り、代わりに冷たい手で心臓を鷲掴みにされたかのような不快感を感じていた。

しかし、それをスノウの前で見せるわけにはいかず、表情を取り繕う。

幸いスノウも魔剣に触れた事に若干興奮しているようで気づいた様子はなかった。

「その魔剣に書きこまれていた起動式によると君のそれは魔剣の中でも特に凶悪な事で有名な吸魂術式だよ。エンチャントクロウ喜びたまえ、これで君もこの町を代表する冒険者の一人だ」

紫炎の魔術師スノウ「ローレライはその唇を微かに釣り上げて笑った。

後になって振り返るとこの時から俺はこの町を巡る争いに本格的に巻き込まれていたのだった。

スノウと別れた俺は足早に図書館へと向かっていた。

スノウの所で思ったよりも時間を使っしまい、本来の目的である『歪み』について調べる時間があまり残っていなかったからだ。こ

の学園の図書館は冒険者学校の施設の癖に締まるのが早い。

なんでも膨大な書籍を管理するにはそれだけ時間がかかるというらしく、日が沈む前には締まってしまふのだ。

せめて目星だけでも付けておきたいと考えたて足を速めていた俺は、少しかだけ注意力が散漫になっていたらしい。突然曲がり角から飛び出してきた小柄な影に対し反応が遅れてしまったのだ。とっさの判断で避ける事は諦め衝撃に備える。

「きゃっ？」

「っと」

しかし、俺が思っていた程の衝撃はなかった。

妙に柔らかい感触と共にぽすんと間の抜けた音と共に俺の胸に飛び込んできたのは小柄な少女だった。

少女は女性としても小柄な方で俺の制服にすっぽりと顔をうずめたまま動かない。

俺の方に衝撃がなかったから安心していたが、もしかすると彼女にとってはそうではなかったかもしれない。少女の線の細さを考えれば十分に考えられる事だ。一度そう考えるとだんだん心配になり俺は胸の中の少女に声をかける事にした。

「おい大丈夫か？」

「あわわっ、急に真っ暗になって何処からか声が聞こえてきますっ。これはアレでしょうか『力が欲しいか』 っとか聞かれるんでしょうか？」

「頭は大丈夫か？」

「斬新な切り口っ！」

「あと君は本の読み過ぎだ」

「ってあら？」

肩をぱんと押して顔と胸の間に隙間を空けてやる。ついでに俺は胸の所でもごもご言われる感触から解放された。

「ぶはっ。あのっ、ぶつかってすみませんでした。急いでいて不注意でしたっ」

少女があわあわと慌てながらこちらに頭を下げてる。どうやら落ち着きを取り戻したようだ。

距離が離れた事であらわになった少女の容姿に俺は目を瞬かせる。

人間種にしては珍しい金の髪に全体的にすらっとした四肢。ぱっちりと開いた青の瞳。そしてなにより纏う魔力の質が同族のものに似ていた。

心なしが彼女からは故郷の森に似たやさしい香りが漂っているようにも感じられた。もしかすると同族の血を引いているのかもしれない。

俺が彼女にそんな懐かしさにも似たなにか感じていると、少女の瞳にみるみるうちに涙が溜まっていく。

「あああのっ、もしかして怒ってます？ 怒ってますよねっ！ どうしようどうしようっ」

何を想像したのか顔を青くして謝罪を繰り返す少女に嘆息する。

昔の仲間にも言われたのだが、どうやら俺は初対面だといつも怒っているように見えるらしい。

だいが改善したと思っていたのだが少女の反応を見るに完治にはいたっていないらしい。

「君はもう少し落ち着いた方がいい。いいか俺は怒ってはいない。

……それに俺も不注意だった。君の方こそ怪我はなかったか？」

俺はなるべく穏やかな言葉を選びつつゆっくりと少女に語りかける。先ほど同族に似ていると思ったのが嘘のように少女は活発そうで落ち着きがなかった。

そんなエルフは生まれてこの方見た事がなかった、やはり先ほどの推察は俺の勘違いなのだろう。

「そつ、そうですか良かったです。私、頑丈だけが取り柄なのでピンピンしてます」

何とか誠意が通じたのか少女は落ち着きを取り戻し、力瘤を作る仕草をし元気をアピールする……が油断はできない。俺はまた何かやらかすのではないかと迷宮で発見した宝箱のような危うさを彼女に感じていた。

「ならこの件はおしまいにしよう。……そういえば君、急いでいるんじゃないかったのか？」

「あつそうでした。すみません、私これで失礼します」

そういうと彼女は俺とぶつかった時に落としたであろう紫色の表紙の本を拾うと走り去って行った。

「あの様子だとあの子また転ぶような気がするな」

そう呟きながら俺は来た道に背を向ける。窓の外は既に暗い。少女とのやり取りでもう図書館は閉館時間になっているはずだ。それにアンナが武器を返してくれる日までまだ時間はある。

今日は他にも成果があった事だし明日また行く事にしよう。

「そっそんなあゝ！ 間にあわなかった」

遠くから聞こえてくる少女の叫び声を聞きつつ、俺は帰路へとついた。

おまけ

モンスターレシピ？

Name： アンリミテッドアリゲイツ

カテゴリ： クラス？ （大型魔物 主に迷宮主などが分類される）
ステータス

パワー：A 頑丈さ： B+ 戦技： なし 知性： D スピ
ード： C- 総合危険度： B

特殊能力： 大喰らい 危険度なし おいしいものをいっぱい食べ
られる

耐性属性：氷弱点は火または雷

備考

冒険者を志す者にとっては登竜門と呼ばれる存在。これを倒せたらとりあえず一人前。

ほぼすべての冒険者にとって初めて遭遇するカテゴリ？の魔物。その巨大な顎から繰り出される一撃は驚異の一言。後ろに回り込んだ際には尻尾に注意。

しかし巨大すぎる身体が災いし狭い通路に逃げ込むと追ってこれない。上に頭がはさまって動けなくなる事もあるおバカさん。

だがその首は思ったよりも伸びる上によく曲がるため油断は禁物。その胃袋は加工され『冒険者の袋』となり多くの冒険者に愛されている。

『冒険者の袋』は供給量が少なく冒険者以外の者がこれを使う事はあまりない。

元々の胃袋は積載量は無限だが加工段階で入る量が減ってしまう。それでも倉庫一個分位は入る。

限界以上詰め込むと元の胃袋に戻ってしまい入れた物が取り出せなくなる。

そのため限界まで達したら追加加工するか新しいものを買いましょう。

欲張りは身を滅ぼします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7746x/>

迷宮は就職氷河期

2011年11月12日00時37分発行